

地元出身の作家を活用した観光まちづくり
—青森県三戸町における「11 ぴきのねこ」を事例として—

尾下 優花

近年、映画やアニメなどの舞台となった地域や場所をファンが訪れる“聖地巡礼”というものが一般化してきており、多くのファンが地域を訪れることで地域振興へ影響をもたらしている。このような作品の舞台を訪れる聖地巡礼についての研究は多く見られるが、作品の舞台ではなく作者の出身地であることを活用したまちづくりについての研究はあまりされていない。そこで本研究では絵本「11 ぴきのねこ」の作者である漫画家馬場のぼるの出身地、青森県三戸町で行われている「11 ぴきのねこ」を活用したまちづくりに着目して考察する。

三戸町は「11 ぴきのねこ」の関連事業に精力的に取り組んでおり、これまでも70以上の事業を行ってきている。町全体で「11 ぴきのねこ」を活用したまちづくりに取り組むようになった結果、観光客は増え、「11 ぴきのねこ」は三戸町ならではの魅力となった。三戸町はふるさと納税の返礼品としても「11 ぴきのねこ」を活用し、三戸町を訪れることが難しい県外のファンからの支持も増やし続けている。また、ふるさと納税による寄付金の使い道として「11 ぴきのねこ」のまちづくりが寄付者から最も多く選ばれていることや、寄付金の優良事例として認められたことから多くの人々から期待されていることがうかがえる。

さらに観光客を増やすだけにとどまらせないために、移住を希望している人の手助けとなるサイトを活用して、三戸町の人口減少に歯止めをかける活動も行っていった。今までやこれからの三戸町のまちづくりを見て、移住を考えているという人を増やすという意味でも「11 ぴきのねこ」を活用した唯一無二のまちづくりに精力的に取り組むことは一時的な成果ではないということがうかがえる。

また、これからもさらなる発展が期待でき、三戸町出身の漫画家馬場のぼるが生んだ「11 ぴきのねこ」はこれからも三戸町のまちづくりを支え続けていく大きな柱となっていくと考える。